

第20回SGRAチャイナ・フォーラム

「大航海時代の美術 —ポルトガルからマカオ、長崎へ—」

共同主催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）、澳門大学歴史学科、清華東亜文化講座

2026年11月20日（金）15：00～17：30（中国時間）

16：00～18：30（日本時間）

会場：澳門大学E34-G011教室

およびオンライン（Zoomウェビナー）

言語：日本語・中国語（同時通訳付き）

参加費：無料

開催趣旨

公益財団法人渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）は2007年から毎年、北京を中心とした中国各地の大学等で、日本の民間公益団体の主宰者を招いてSGRAチャイナ・フォーラムを開催してきた。2014年からは趣向を変え、清華東亜文化講座のご協力をいただき、中国在住の日本文学や文化の研究者を対象として、東北アジア地域の近現代史を「文化と越境」をキーワードに議論を重ねている。本年も、これまでの成果を踏まえながら、「東アジアにおける広域文化史」の可能性を探る。今回は講演者にアントン・シュヴァイツァー先生（九州大学）と鷲頭桂先生（国立歴史民俗博物館）をお迎えし、マカオの地とも関係の深い南蛮美術をグローバルな視点や記録から捉え直す。日中同時通訳付き。

参加にあたってのお知らせ

■ 事前登録のお願い

QRコードまたはURLからお申込みください。登録URL：<https://x.gd/FPVQ3>

■ 同時通訳をご希望の方へ

会場で同時通訳を利用する場合は、Zoomへの接続が必要となります。

インターネットに接続できる端末とイヤホンをご持参ください。会場のWi-Fiをご利用いただけます。

■ 会場【澳門大学 崇文楼（E34）G011教室】

中国マカオ特別行政区タイパ 大学大馬路

■ お問い合わせ SGRA 事務局：sgra@aisf.or.jp

■ SGRAとは

関口グローバル研究会（Sekiguchi Global Research Association/SGRA）は、良き地球市民（Global Citizen）の実現に貢献することを目標に2000年に設立されました。渥美国際交流財団の所在地、東京都文京区「関口」に因みます。SGRAは日本の大学院で博士号の取得を目指して研究を行い、渥美奨学生として共に過ごした外国人および日本人の研究者が中心となり、現代の課題に立ち向かうための研究や提言を、フォーラムやレポート等を通じて社会に発信しています。幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動が狙いで、多国籍の研究者が広汎な知恵とネットワークを結集し、多面的なデータを用いて分析・考察を行います。



参加登録



キャンパスマップ



総合司会：林 少陽（澳門大学歴史学科／SGRA／清華東亜文化講座）

16：00 開会挨拶

16：10 【講演1】「グローバルイベントとしての南蛮美術」

アントン・シュヴァイツァー（九州大学人文科学研究院）

「南蛮美術」は一般に、南蛮人に関連する絵画、染織、漆工、金工、陶磁器、その他の作品を包括する総称として用いられている。「南蛮」とは、16～17世紀にポルトガル船によって日本にもたらされた人々や文化を指す日本側の呼称の一つである。南蛮美術は少なくとも三つの下位類型に区分することができる。(1) 日本の絵師・工人が、日本の伝統的な素材、器種、図像を用いて制作した、南蛮人やその文化を描いた作品 (2) 南蛮人の注文に応じて、日本の絵師・工人が外国風の様式や形式で制作した作品 (3) 日本におけるイエズス会絵画学校に関わった外国人および日本人の画家によって制作され、ヨーロッパと日本双方の様式・素材を融合させたハイブリッドな作品である。

従来、南蛮美術は日本とポルトガルとの二国間の交流の産物として理解されることが多かった。しかし近年の研究では、その成立に関与した文化、芸術的伝統、人々の多様性と複雑性がますます重視されるようになっていく。ポルトガル船の乗組員には多数のアフリカ人、アラブ人、インド人、その他のアジア各地の人々が含まれていた。また、南蛮様式は西アジア、南アジア、東南アジアの芸術的伝統から多くの要素を取り入れており、アフリカやアメリカ大陸に由来する素材や技法も南蛮の視覚文化・物質文化の形成に重要な役割を果たした。同時に「東アジア地中海」世界の各地——マカオをはじめとする諸地域——には日本人海外居住者の共同体が形成され、活発な活動を展開していた。

本講演では、南蛮に関連する芸術制作を「第一次グローバル時代（First Global Age）」というより広い歴史的文脈の中で捉え直す必要があることを論じる。この視点を採用することにより、広大な地理的・文化的空間を横断して展開した様式、図像、素材、さらには知的交流の複雑なプロセスを、より多角的かつ精緻に理解することが可能となる。

16：50 【講演2】「16～17世紀アジアの交流と視覚表象——日本における絵画の記述と流通」

鷲頭 桂（国立歴史民俗博物館／総合研究大学院大学）

16世紀半ば、交易や布教を目的として来日したヨーロッパの人々が、日本で見聞した事柄について詳細な記録を残したことはよく知られている。膨大な量にのぼるそれらの記録には、日本側の文献資料には見られない内容が数多く含まれており、示唆に富む。

本講演では、16世紀後半から17世紀初頭にかけて作成された報告書や書簡などの欧文資料を中心に、日本側の日記などとも比較・参照しながら、当時日本ではどのような絵画作品が人々の目に触れ、いかなる評価を受けていたのかを考察する。具体的には、権力者の空間を彩った城郭建築の金地障壁画、瀟湘八景図に代表される水墨画に対する言説、さらにキリスト教布教とともに伝来・制作された聖画や洋風画という三つの視点から、日本における絵画の受容と流通の実態を探る。

後半では、同時期に中国で宣教活動を行ったマテオ・リッチの記録に基づき、贈答品や美術に関する記述を分析する。リッチの記録には日本に関する記事も少なからず含まれており、日本と中国における宣教活動が相互に関連していた実態を明らかにしながら、1600年前後の東アジアにおける絵画の流通と受容について考察したい。

17：30 【指定討論】

討論者：王 廉明（香港城市大学中国語・歴史学部）

17：40 【自由討論】

モデレーター：グロリア・ヤンユー（九州大学人文科学研究院）

18:20 閉会挨拶

18:30 閉会

登壇者紹介

(登壇順・敬称略)



アントン・シュヴァイツァー (Anton Schweizer)

九州大学大学院人文科学研究院教授。ハイデルベルク大学東アジア美術史研究所講師、ニューヨーク大学美術研究所アンドリュース・メロンポストドック、テュレーン大学美術学部教授を経て、2018年より九州大学に着任。専門は日本近世美術史・建築史、物質文化研究。主な著書に『Ōsaki Hachiman: Architecture, Materiality, and Samurai Power』(Dietrich Reimer Verlag GmbH, 2016年)、共編著に『Japanische Lackkunst für Bayerns Fürsten: Die japanischen Lackmöbel der Staatlichen Münzsammlung München』(Staatliche Münzsammlung München, 2011年)。主な論文に「Nanban Lacquer: Global Styles and Materials in a Japanese Cabinet」(2024年)、「Bridges into Metaphorical Space: Hideyoshi's Imperial Landscape at Osaka」(2023年)、「Puppets for the Margravine: Japanese Ephemera and their (Re)Construction in Eighteenth-Century Chinoiserie」(2021年)など。近年は初期グローバル時代における東アジア、ヨーロッパ、アメリカ間の美術・物質文化交流、および日本近世の遊郭文化を研究している。



鷺頭 桂 (わしず・かつら / WASHIZU Katsura)

国立歴史民俗博物館研究部准教授。東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了。福岡市美術館学芸員、国立文化財機構(九州国立博物館、東京国立博物館、文化財防災センター)研究員・主任研究員を経て、2024年より現職。専門は日本美術史。主な論文に「月次風俗図屏風の光学調査―犬追物図と富士巻狩図を中心に―」(『MUSEUM』706, 2023年)、「世界史のなかの南蛮美術」(『美術フォーラム21』46, 2022年)、「柳橋水車図の成立をめぐる再考察」(『香雪美術館研究紀要』4, 2022年)。主な担当展覧会に『北斎HOKUSAI 日新除魔図の世界』(九州国立博物館, 2022年)、『世界と出会った江戸美術』(東京国立博物館, 2020年)、『大航海時代の日本美術』(九州国立博物館, 2017年)など。



王 廉明 (WANG Lianming)

香港城市大学中国語・歴史学部准教授。ハイデルベルク大学東アジア美術史専攻博士。研究分野は明清期中国の美術・建築史。現在、近世における越境的な芸術交流、動物貿易、外交贈物の交換、イエズス会美術、および清朝宮廷造弁処などのテーマを中心に研究を行っている。主要著作に『北京のイエズス会遺産：1600～1800年における宗教建築と越文化的空間』(*Jesuitenerbe in Peking: Sakralbauten und transkulturelle Räume, 1600–1800*, Winter Verlag, 2020年)があり、2021年度ハイデルベルク科学アカデミー学術賞を受賞。代表論文には「Walking Elephants To Beijing: Manipulation, Local Bureaucracy, and the Forging of Peace in the Qing Southwest Frontier, 1700–1800」(*Monumenta Serica*, 2026年)、「When the Barbarians Came by Sea: Hunting and Alienism in Entangled Sino-Japanese Visual Cultures, 1550–1750」(*World Art*, 2024年)、「A World Dotted with Kingfisher Blue: Feather Tributes and the Qing Court」(*Social Lives of Chinese Objects*所収、Brill, 2023年)など。現在、ドイツのゲルダ・ヘンケル財団(Gerda Henkel Stiftung)の助成を受けた研究プロジェクト(課題番号AZ 47/V/20)を主宰し、清朝の「グローバル動物史」を主題として、美術史の視座から清代中国における動物貿易、および全球的な物質・生態的つながりを再検討している。